

Title	『緋文字』における声と文字
Sub Title	Voice and letter in The Scarlet Letter
Author	竹野, 富美子(Takeno, Fumiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.294(87)- 309(72)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0309

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『緋文字』における声と文字

竹野 富美子

ホーソーンの代表作『緋文字』の主人公ディムズデイルについて描写するとき、作者はほとんど何もその身体的特徴について読者に知らせることはない。読者の印象に残るディムズデイルの特徴は、ただその豊かで人を引き付ける声と、最終的に明らかになる胸のしるしだけであるといえよう。これは黒い髪と瞳、貴婦人のような威厳と気品をもち、金糸で縁取りをした緋文字 A を身につけるヘスター、深紅の華やかな洋服を着た、黒い巻き毛のパールといった絵画的な美しさをもつ女主人公たち、一方の肩が他方より上がった、皺だらけの初老の男という肉体的特徴が繰り返し強調され、悪魔的な表象を担うチリングワースとは対照的な扱いである。

胸に A の文字をつけた女性の登場から始まり、A の刻まれた墓石の墓碑銘で終わるこの物語は、文字についての物語とも言えよう。物語が進むにつれてさまざまな意味を付与されるようになる緋文字の役割について、F. O. マシーセンは“the device of multiple choice”，サクヴァン・バーコヴィッチは“a strategy of pluralism”とみなし、テレンス・マーティンやチャールズ・ファイデルスン Jr. に至っては、A の文字そのものが物語の中心になっていると断じている⁽¹⁾。このようにしばしば文字についての解釈を誘発するほど文字と深く関わる『緋文字』において、十七世紀の清教徒共同体に主流であった口頭文化の伝統を体現するようなディムズデイルは、どのような位置を占めるのだろうか。

本論においては、『緋文字』が書かれた十九世紀中葉までに著しく発展した出版メディアと、それに伴って文化を消費する公衆へと変質した公共領域が与えた『緋文字』への影響を視座としてすえながら、この物語がホ

一ゾーンによる印刷文化再検討の試みであったことを論証する。

I

まず『緋文字』の舞台となった十七世紀から『緋文字』発表の時代まで、印刷がどのように受け止められていたかを概観する。十七世紀の清教徒社会は口頭文化の社会であった。マイクル・ウォーナーの定義を借りるならば、それは文字を知る以前の無文字社会であったからではなく、口頭による伝達に特別な権威が与えられ、書かれたものが話されることの形態にすぎないと考える社会であったからである⁽²⁾。聖書は「神の生きている言葉、あるいはキリストの声」であり、人びとは聖書を読むことでその言葉を「聞く」ことになると考えられており、説教などの口頭による伝達が重きをなしていた。『緋文字』の時代背景となる1640年から50年にかけての清教徒教会においては回心体験談も盛んであった。これは教会の会衆を前に、真の回心体験を語ることにより、正式な教会員として認可されるという儀式に必須の「語り」(narrative)で、ここにも清教徒たちの口頭伝達にたいする尊重が見られる⁽³⁾。

清教徒たちは印刷を重視していたが、それは神の言葉を正確に伝える手段としてであって、印刷自体がそれと独立して機能を持つことはありえなかった。彼らにとって印刷の機能とは原型を正確にコピーすることにあり、「この世の出来事は聖書の物語を原型 (anti-type) とする予型 (type) であり、影にすぎない」と考える「タイポロジー」概念の実現手段にはかならなかった⁽⁴⁾。「聖霊が私たちの魂にその内容を刻印 (print) しなければ、印刷された書物も何の意味もない」と記した十七世紀のある聖職者や、感銘をうけた文章について「自分の記憶に刻印 (impression) された」と表現したコットン・マザーに見られるように、印刷は神の権威によって裏打ちされた刻印 (stamp)、オリジナルに対する写しであり、その意味では鏡と同等であるととらえられていたのである⁽⁵⁾。

マイクル・ウォーナーが明らかにしたように、アメリカにおいて印刷技術が知識拡散の道具として、また解放のための広報技術として用いられ、

印刷自体が一個の独立した公共領域として認識されるようになるのは、独立革命を経た後のことである⁽⁶⁾。印刷技術そのものを資本主義的イデオロギーに読み替えたフランクリンの例を筆頭に、建国の祖たちは印刷によって「公共領域」という抽象的非人格的な政治空間の概念を作り出すことに成功した⁽⁷⁾。そこでは「中立を保つために」という名目によって虚構の人物による議論が展開され、それを読む読者たちは自分のほかにも印刷物を読んでいる無数の読者がいることを認識するようになったのだった。

独立革命によって引き起こされた、口頭文化から印刷文化への移行は十九世紀半ばには確定的なものとなる。エマソンが表現したように、十九世紀中葉は「一本の木綿糸」ではなく複数の糸によって織られた「織物」がアメリカ合衆国全土に張り巡らされた時期であり、情報の多元化が進んだ時代であった⁽⁸⁾。鉄道などの輸出機関の整備、蒸気機関による印刷機の改良、活版印刷に代わるステロ版印刷の導入などによって、印刷物の大量生産と大量普及が可能になり、印刷物が安価に広範囲に手に入れられるようになった⁽⁹⁾。1825年から50年の間に雑誌数は100から600に増え、新聞も1831年までには英仏両国と比較して、ざっと3倍の部数が出版されるようになってきている⁽¹⁰⁾。この時期には印刷媒体と同様に、講演やライシーアム、政治演説も人気を誇ったが、これは活字メディアの間接性、非人格性を補うためのものでしかなかったと、ドナルド・スコットは指摘する。マーガレット・フラーは、話の方が書く物よりも優れていると人から評されるのは「二流の精神」をあらわしているようだと言っており、講演は新聞などの活字メディアによってその権威と人気を支えられていたのだった⁽¹¹⁾。

ハバースマスが論証するように、独立革命が構築した公共領域は、十九世紀中葉までには文化を消費する公衆へと移行している⁽¹²⁾。このころまでには文芸産業はひとつの資本産業としてなりたち、文芸作品は読者に消費される商品となっていった⁽¹³⁾。新聞メディアの発達などによって複数選択が存在するようになった時代は、同時に北部と南部が奴隷制廃止問題で対立を深めていった時代でもあった。キャロライン・ポーターは、逆に商

品として消費されるようになったジャーナリズムの興隆が、世論を両極端へと分裂させていった可能性を示唆する⁽¹⁴⁾。例えば当時最大部数を誇った『ニューヨーク・ヘラルド』紙はまた、保守的反奴隷制廃止の立場を鮮明に打ち出しており、そのようなセンセーショナルな報道がその成功の要因でもあった。トクヴィルはすでに1830年代に、アメリカでの新聞雑誌の数の多さに言及しながら、その破壊好みと横暴さによる影響について論じている。

As equality spreads and men individually become less strong, they ever increasingly let themselves glide with the stream of the crowd and find it hard to maintain alone an opinion abandoned by the rest⁽¹⁵⁾.

広範囲にわたる情報拡散が可能になり、情報源が多様化することによって、共同体での情報だけに頼っていた個人は一人ひとりに分断されていく。分断された個人は群衆が耽溺している世論に容易に巻き込まれてしまうとトクヴィルは懸念する。活字媒体の普及と商品化によって形成されつつあった疑似的な消費文芸共同体は、その広範囲で多様な選択肢のために、帰属意識をかりたてるようなセンセーションを必要とし、それが奴隷制廃止問題の激烈化を生み出した。ほかならぬ『緋文字』はこのような歴史的背景のもとに生み出された作品なのである。

II

『緋文字』の序章にあたる「税関」に描かれている印刷のイメージは、まさに十九世紀中葉における印刷の状況を示している。そこでは印刷物が広範囲にわたって拡散され、かつて政治の中心であった印刷による公共領域は、視線にさらされる見世物の場へと変質し、文化を消費する公衆によって、商品となった出版物が消費されるようになっている。

Some authors . . . indulge themselves in such confidential depths of revelation as could fittingly be addressed . . . to the one heart and mind of perfect sympathy; as if the printed book,

thrown at large on the wide world, were certain to find out the divided segment of the writer's own nature, and complete his circle of existence by bringing him into communion with it (3-4)⁽¹⁶⁾.

作家たちは不特定多数の読者からなる「この広い世の中」という消費空間に、内心の秘密をさらけだした本を印刷しては「投げ出し」、数多くの読者にも買ってもらうことでその本の「存在の環を完成させる」。とてもそこまで内心をさらけだせないと怯み、「語り手と聞き手のあいだに何らかの実質的な関係」(4)を求める「作者」でさえ、この状況を免れ得ない。税関検査官をつとめる作者は、胡椒の麻袋、ベニノキの実の籠などの商品の梱包に、正規の通関手続きが完了した証拠に自分の名前が刷り込まれ、ただの記号となって「これまでいたこともないところや、二度とふたたび行きたいと思わないところへ」(27)運ばれてしまう。さらには政権交代に伴って税関を罷免された作者は、その正否をめぐって新聞に取り上げられ、いわば生身の人間としての実在感を伴わない記号として、「おおよけの印刷物」なる架空の空間を行き来するようになる。

Meanwhile, the press had taken up my affair, and kept me, for a week or two, careering through the public prints, in my decapitated state, like Irving's Headless Horseman; ghastly and grim, and longing to be buried, as a politically dead man ought (42-43).

現在の印刷状況に違和感を持つ作者が『緋文字』を世に問うにあたって想定するのは、親しい二、三の友に直接語りかけるという設定である。それによって彼は「生来の警戒心がほぐれ」「自分自身についてもかなり気軽に」(4)語ることができるようになると主張する。「公衆の胸倉をつかまえ」私的経験を「聞いて」もらおうと、「語りかけて」(3)いる「税関」は、不特定多数の読者と作者の關係に、直接的な口頭による伝達を装おうとしている。『緋文字』の由来も、口承のもつ直接性を纏った物語である。古老であった人たちから口頭で話を聞いて私的な文書として書き留

められたピュー氏の遺稿は、おそらくは印刷されている公文書のなかにあつて、氏自身の手によって書かれたものである。古老からピュー氏へ、さらにホーソンへと伝わって行くヘスター・プリンの伝承を書き留めることは、拡散と消費、はたまた非人性格性を特徴とする十九世紀の印刷文化とは反対の方向を志向する。

では「税関」において「読者と親密な関係をもちたい」(4)と考えている「作者」は、『緋文字』の物語を語ることで、この直接性を取り戻すことができるのだろうか。ここではまず、ヘスターの文字とディムズデルの声を中心に取り上げて考察する。

III

『緋文字』の物語の冒頭、初めて監獄から姿を現したヘスターは、緋文字をつけたその衣装によって、以前から彼女を知っている男女にもまるで彼女をはじめて見たような印象を与えたとされる。奇抜な縁飾りのほどこされた緋文字が「魔術のような効果をもち、彼女を通常の間人間関係から引き離し、彼女だけの領域に封じ込めた」(54)と説明しているのである。他方、緋文字によって彼女だけの領域に封じ込められながら、衆人環視の的となっているヘスターとは対照的に、教会のバルコニーからさらし台にいるヘスターに話しかけるディムズデルは、その「甘美で豊かで深みのある声」によって「すべての人たちの心のなかで共鳴し、すべての聞き手の共感をかきたてた」(67)のである。

マイケル・ギルモアも注目するように、『緋文字』の物語の冒頭で最も読者の印象に残るのは、ヘスターとディムズデルのこの対置関係であろう⁽¹⁷⁾。人を遠ざけるヘスターの文字と人びとを魅惑するディムズデルの声という対照関係は、二十二章「行列」に至るまで貫かれている。人びとから畏怖され、「まわりの小さな人のいない場所——一種の魔法の輪ができてしまう」(234)という緋文字をつけているヘスターに対し、ディムズデルは暖かく豊かで甘美な声で人びとを魅了する。彼の声は「天使できえが耳を傾け、応答したであろうような天上的資質」(142)がそなわっ

ていて、何千もの他人の心を動かす説得力のある雄弁ができるのであった。ウィルソン牧師の「荘厳な」(64)声が「容赦なくとどろきわたった」(69)にもかかわらず、ヘスターには馬耳東風であったのに比べ、ディムズデールの声にはうつろな甲冑でさえ「声ともに鳴りひびいた」(114)とされている。宗教と法律がほとんど一体をなしていたといわれる清教徒社会にあって、牧師ディムズデイルは豊かな声によって聞く者の共感を引き出し、彼らの結束を深め、共同体の中心として人びとを引き付ける磁力となっている。他方、人を畏怖させて彼女の回りに一種の魔法の輪を作ってしまうヘスターの緋文字は、その周辺性によって共同体の領域を形成するのである。

二人の対置関係は「税関」での作者の理想と現実とを示しているとも言えよう。語る声によって人びとを魅惑するディムズデールと会衆とは、そのまま「税関」の語り手が理想とする作者と読者の関係を持っている。『緋文字』の初版部数二五〇〇とほぼ釣り合う、「何千もの他人の心」(142)を動かす説得力のある雄弁のできるディムズデールがいる一方で、自分の名前がただの記号となって世間に広まってしまったホーソンのように、Aの文字だけをつけ、生身の人間ではなく「罪の象徴となり化身」(79)となりはてたヘスターがいる。

「女性の罪深い情熱の生きた姿、普遍的な象徴」(79)とされたヘスターは、清教徒共同体において、説教の題目の主題となって語られる対象とはなっても、語る声をもたない。それは社会が抑圧したせいでもあるが、それ以上に語ることを彼女自身が拒否しているからでもある。愛人の名前を告白し、罪を悔いるならば胸の緋文字を取り去ろうというウィルソン牧師の提案を彼女は「緋文字はあまりにも深く胸に焼き付けられています」(68)として拒んでいる。ヘスターはいわば、当時盛んであった回心体験談の形式に倣って罪の懺悔を人びとの面前で語ることを拒否し、あえてAの文字をつけることを選んで、語られることに権威を見いだす共同体の口頭文化への参加を拒否している。自ら看病した病人たちと路上で会っても、彼女は顔をあげて挨拶をうけることもなく、文字に指をおいてさり(78)

げなく通り過ぎる（162）のである。

私生児の出自に関して沈黙を保ち、その結果としての緋文字だけを人びとにさらすこと。さらにはそのためにただの記号となって世間に受け入れられること。まさにヘスターのこの選択は、十八世紀以降の印刷空間における作家たちの姿を思わせる。非人格的な印刷という虚構空間で、直接的なコミュニケーションはないまま、作家たちは自らを虚構のペルソナとして構築し、文学作品を世に送り出す。このように見るとき、清教徒共同体にとっての異端者ヘスターとその娘パールは、十七世紀の口頭文化社会におかれた十九世紀的な意味での作家とその作品であり、活字であると見做すこともできる。なるほどパールという単語には、「最小の大きさの活字」という意味もある。

事実ヘスターの行動を、独立革命によってアメリカ社会を口頭文化から印刷文化へと移行させた建国の祖たちの行動と重ねあわせることも可能であろう。五十五人の連邦会議の代表者たちは、独立宣言公布の当初、宣言を作り出すまでの過程の議論について、一切他言をしないと申し合わせた。それは相互の利害がからむ代表者たちの意見のずれが明るみに出ることを、沈黙によって最小限に抑えるためであった。私的議論は公的言語へと包括され、実際に宣言を作り出した父親は誰なのかについては沈黙を保ったまま、建国の祖たちは生み出された独立宣言を活字の子としてのみ世に送り出したわけである⁽¹⁸⁾。

それでは、ヘスターが共同体に受け入れられていく過程は、口頭文化から印刷文化への移行過程と見るができるのだろうか。ここで注目しなくてはならないのは、Aの文字を巡るヘスターと清教徒たちの態度である。ヘスターにとって、胸につけた緋文字は「世間が彼女につけさせたものであり」（89）「清教徒の法廷が」「巧妙にもくろんだ」（85）ものである。一方、清教徒たちにとって、緋文字は清教徒の社会規範が彼女に押し付けたものであるわけだが、いったん彼女がそれを着用する段になると、それは彼らの手を離れて「人間の同情を彼女に寄せ付けない強力で不吉な魔力をそなえる」（89）ようになる。しかし、両者に共通なのは、緋文字

は神の聖なる刻印 (brand) とする、予型論 (typology) にもとづく思考の枠組みに支えられた観念である。愛人の名を明かすようにと強要されたヘスターは「緋文字があまりにも深く胸に焼き付けられて (branded) います」(68) と告白を拒否する。しかも見知らぬ者が緋文字を物珍しそうに眺めると「またもやあらたな緋文字がヘスターの魂に刻印 (branded) されるのだった」(86)。さらにはこれは「カインのひたいに刻印された (branded) しるしよりも女性にとっては耐え難い」(84) ことであった。ここで使われる“brand”という単語は、第一義としては焼きごてによる犯罪者への烙印を指し示し、ここでの彼女の“brand”の使用は、本来なら彼女に適用されるはずであった処罰への言及ともなっている⁽¹⁹⁾。しかし同時に「カインのしるしのように」焼き付けられたというたとえにも見られるように、緋文字は神の聖なる刻印である。聖書はインクと紙でできていながら生命をもつキリストの「声」であると信じ、聖書があることで神が側にいるように感じられた十七世紀の清教徒たちと同様、『緋文字』のヘスターや清教徒たちは A の文字に書き手としての神、刻印者としての神の存在をみている。だからこそ町の人びとは緋文字を「単なる緋色の布ではなく、地獄の火によって赤く熱くもえている」(87) と噂したのである。ここに見られるのは「オリジナルなものに対してコピーがあり、この世の出来事は聖書の物語を原型 (anti-type) とする予型 (type) であり、影にすぎない」とする清教徒の予型論的思考の枠組みである⁽²⁰⁾。それは「言葉によるにせよ、予型や象徴によるにせよ、人間の心に埋められているかもしれない秘密を白日の下にさらす力は、神の恩寵以外にはありえません」(131) と述べるディムズデルの言葉によっても裏打ちされている。

印刷を神の権威によって裏打ちされた刻印 (stamp)、オリジナルに対する写しととらえた十七世紀の清教徒たちと同様、ヘスターにとっても町の人びとにとっても、緋文字は清教徒の口頭文化の枠組みに包括された文字としてとらえられているのである。

IV

清教徒たちの活字や緋文字への態度は、チリングワースにもみられる。十七世紀の清教徒が、活字は忠実に聖書の言葉をコピーする道具であると考えたのと同様に、魂と肉体には密接な関係があり、魂の秘密は正確に肉体の痕跡となってあらわれると考えるチリングワースにとって、心の悩みが肉体のうえに現れるのは「精神にとって肉体はいわば道具」(136)だからであって、肉体の病気は「精神上の病の一徴候にすぎない」(136)。彼は「男は、おまえのように、恥辱の文字を衣服に縫いつけていないが、わたしはその文字をそいつの胸に読み取ってみせる」(75)と宣言し、デイズデールの症例に「魂と肉体のあいだに奇妙に密接な関係がある」(138)とほくそ笑むのである。これは十九世紀アメリカに台頭し、のちヘミングウェイの短編「医師の妻」に反映するキリスト教の一派「クリスチャン・サイエンティスト」の観念と似通うところもある。

パールの本性を分析して「その性質や特質から、父親を正確に言い当て」、ひいてはヘスターの愛人の胸に緋文字を読みとろうとするチリングワースは、物語で言及されている、神の手で書かれた文字を解読した預言者ダニエルのようにこれらのしるしを読む読者として登場する。しかしチリングワースと清教徒たちとの違いは、人間の心の秘密が表に現れることに関して、彼は神の介在を信じていないことにある。人間の心に埋められている秘密を白日の下にさらす力は、神の恩寵のみであると考えるデイズデールに対し、自然科学の知識を持ち、「なにかの詮索をはじめるときには、空中に引かれた幾何学の線や図形であるかのような態度で、ひたすら真実のみを求め」(129)、聖職者には見られない「観念の自由闊達さ」(123)を持つ科学者としての彼は、自然科学を後ろ楯に発展し「理性の尊重、人間の認識能力への信頼、体系への確信」などを特徴とする啓蒙思想的な知性と通じると見ることができよう。

チリングワースの「観念の自由闊達さ」と比べ、清教徒神権制を補強する予型論という「鉄の枠組み」(123)に支えられ、緋文字にひとつの意味

しか見出せなかった清教徒やヘスターたちの見方は、物語の中間「牧師の勤行」において変化する。ディムズデールが人目にさらす勇気はないにせよ、自分の罪を認めるために真夜中のさらし台にヘスターやパールと共に立つと、流星が空に輝き、空一面に光がたれこめた。語り手はそれを国の運命を顕した象形文字ではないかと示唆し、ディムズデールは姦通のAととらえる一方、町の人びとはそれを天使のAと考えていた。この時点でAの文字は、それが実際に現れたのかどうかをも含めた、さまざまな解釈を可能にする。次章「ヘスターの別の見方」では、多くの人びとによってヘスターのAは姦通ではなく、有能(able)の意味となり、ヘスター自身も緋文字が「別の意味を伝える何か」(169)になる可能性を認めるようになる。

ヘスターをとりまく清教徒共同体の態度に変化が見られる一方で、「観念の自由闊達さ」をもち、啓蒙思想的知性によって正確にしるしを読むことのできたチリングワースは、逆にひとつの解釈にこだわることで、解釈の失敗者となっていく。彼はAの意味を姦通であるとしか認めることができず、また裏切られた夫という役割関係だけに固執するあまりに、この「暗澹たる迷路」(174)から出ることができなかった。「その憎しみを洗い流して、もう一度人間におもどりになるつもりはございませんか?」「これ以上の罰は、それをお求めになる神の力におまかせ下さい」(173-74)と懇願するヘスターに、チリングワースはこれは宿命なのだと答えて、自己の読みを変えることなく罪を重ねることになる。

罪を犯した自分と、教区民のうけとる外面の自分とが異なるがために、内面の葛藤を続けるディムズデールも、一つの解釈に固執するチリングワースと立場が似ているとも言えよう。オリジナルが正確に写し取られていることを要求する予型論的思考の枠組みを離れられないディムズデールは、まさに十七世紀の清教徒の口頭文化の規範に生きている。ヘスターとの森での会見の後、邪悪なことをしようとする衝動にかられるのも、外面と内面を一致させようとする彼の清教徒的倫理が、別のベクトルへ働いたと見ることができる。

しかしディムズデールは胸に刻まれた緋文字を露呈し、会衆の前で告白をすることで内面と外面の乖離を解消し、自己の清教徒倫理を完遂して息絶える。会衆の前で自己の罪の告白と懺悔をし、神の恩寵による救済の経験と信仰告白を語る内容は、簡略ながら回心体験談の形式に則っているとも言え、ディムズデールが徹頭徹尾、口頭文化を遵守する聖職者だったことを窺わせる。

ここで注目しなくてはならないのは、ディムズデールの告白の主語が、途中で「わたし」から「彼」へと移行していくことである。

“... At last!--at last!--I stand upon the spot where, seven years since, I should have stood; . . . But there stood one in the midst of you, at whose brand of sin and infamy ye have not shuddered!”
.. “It was on him! . . . Now, at the death-hour, he stands up before you! . . .” (254-55)

直接話法の「わたし」から間接的な「彼」への移行は、とりもなおさず直接性を重んじる演説から、客観性を纏う文章への移行でもある。だからこそディムズデールは、自分の胸にも文字を刻み付けていることを見せるのである。ここには、この物語において「編者」でありたいと願う「税関」の「作者」の声も重なってくるのではないだろうか。「読者と親密な関係をとりたい理由」(4)とは「編者としての立場に身を置きたいため」(4)とする作者にとって、物語の作者でもなく口頭伝承の語り手でもない、客観的に作品を校正する編者でありたいと願うことは、「わたし」の直接性よりも「彼」の間接性を選ぶことでもある。

尊敬すべき牧師の緋文字の露呈とその死に、聴衆は言葉にならない低いつぶやきで応えたという。説教によって引き起こされた共鳴でも、感情の高まりでもないその反応は、感情をかきたてる煽情的な口頭文化の終わりを意味しているのではないだろうか。それだからこそ、パールは生きていく文字としての役割を終え、「世間の中で一人の女性となる」(256)のである。ディムズデールとヘスターが後にした森では「森がそのおびただしい舌をもって、そこで起こったことがらを末長く語りつぐことであろう

が、人間の耳にはなんのことだかわかるまい」(213)とされている。語り伝えることや口頭での伝達に権威をもたせる口頭文化は、ここにおいてその役割を終えたのである。

「結び」において、ヘスターが再び海辺の小屋に戻って緋文字をつけたとき、それは「世間の嘲笑と顰蹙を買う烙印であることをやめ、悲しむべき何かの象徴になり、畏怖をおぼえながらも尊敬をもって眺めるべき象徴(type)となりおおせたのであった」(263)という。ディムズデールはAの文字を公けにする(publicize)ことによって、それを見る人びとにもそのAの文字を刷り込んだ(publish)と言えよう。周辺領域を形成していたヘスターの緋文字は、密やかながらも心の重荷を背負った人たちの中心となり、ディムズデールの声のように人びとを共鳴させるのではなく、静かに共感させる象徴となりおおせたわけである。

困った人の相談役ともなったヘスターは、ディムズデールの選挙の日の説教を繰り返すかのように、来るべき新しい時代への信念について語っている。彼女は「もっと明るい時代が来れば、新しい真理があらわれて、男女のすべての関係が相互の幸福というもっとたしかな土台のうえに築かれることになろう」と主張するのであった。「来るべき啓示をもたらす天使は女性であるにちがいない」、「しかしその真理を伝える使命が、罪によごれ、恥にうなだれ、一生の悲しみを背負った女に託されるはずはないだろう」(263)。このように語るヘスター・プリンは、悲しげな目を緋文字のうえに落とすのだった。「来るべき明るい時代」への確信と、現在の墮落した状況への悲しみを語るヘスターの説明は、まさにエレミアの嘆きの形をとっている。神の言葉を正確に映し出すことを強要することで、現世を神の国の鏡像とするよう試みていた清教徒神権政を補強する十七世紀の印刷の予型論は、ここにおいて未来という時間軸上に神の国の出現を確約する歴史の予型論へと形を変え、アメリカの未来を祝福することになる。

ヘスターはAの文字を胸に掲げ、それについての注釈や弁明をすることなく沈黙を続けたまま、見る人のさまざまな解釈を許しながらも、神の刻印であった過去の痕跡を留め、「畏怖をおぼえながらも尊敬をもって眺

めるべき象徴」(263) となったのである。

V

技術改革による大量生産や出版業界の資本化によって、十九世紀中葉は確かに印刷文化が変容していった時代であった。読者は、不特定多数の人びとから成る消費する公衆へと変質し、販売部数を伸ばすため煽情的な記事を書く新聞メディアなどによって南北対立が激烈化していった。この時代には、印刷物が広範囲に拡散することによって、さまざまな職業や民族の人びとを内包した、アメリカ人と称する「架空の国民」が成立するようになったわけだが、それがかえって南北の差異を認めずに解消していこうとする方向に推進力を強めたのだった。ナサニエル・ホーソーンは十九世紀の虚構的印刷空間から、十七世紀の清教徒共同体へと戻り、聖刻された文字を読み、そのさまざまな解釈を許しながら、それを中心として共感し共にアメリカの未来を信じる人びとを描くことにより印刷空間の再構築を図ろうとしたのである。

注

- (1) F.O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (London: Oxford UP, 1941) 276; Sacvan Bercovitch, *The Office of The Scarlet Letter* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1991) 19; Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (New York: Twayne Publishers, 1983) 108; Charles Feidelson, Jr., *Symbolism and American Literature* (Chicago: The U of Chicago P, 1953) 9-13.
- (2) Michael Warner, *The Letters of the Republic: Publication and the Public Sphere in Eighteenth-Century America* (Cambridge: Harvard UP, 1990) 21; 藤本 茂生「書物と読書と民衆と——初期アメリカ史における印刷出版文化」西洋史学170 (1993): 105-19.
- (3) 『オックスフォード版合衆国女性文学案内』によれば、回心体験談では「宗教的無関心から、宗教に目覚め、内的葛藤を経て、神の恩寵の前には無力であるという回心を得る」パターンが踏襲され、通常口頭で行われた。Virginia Brereton, "Spiritual Narratives," *The Oxford*

Companion to Women's Writing in the United States, ed. Cathy N. Davidson et al. (New York: Oxford UP, 1995) また特に十七世紀半のニューイングランドにおいて、回心体験談が重用され、すたれていった背景と過程については次掲書が詳しい。Patricia Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative: The Beginnings of American Expression* (Cambridge: Cambridge UP, 1983).

- (4) Warner 20.
- (5) Warner 22; David D. Hall, *Worlds of Wonder, Days of Judgement: Popular Religious Belief in Early New England* (New York: Knopf, 1989) 28.
- (6) Warner 23
- (7) 巽 孝之『ニュー・アメリカニズム——米文学思想史の物語学』(青土社, 1995) 108-146.
- (8) Carolyn Porter, "Social Discourse and Nonfictional Prose," *Columbia Literary History of the United States*, ed. Emory Elliott et al. (New York: Columbia UP, 1988) 349.
- (9) Ronald J. Zboray, *A Fictive People: Antebellum Economic Development and the American Reading Public* (New York: Oxford UP, 1993) 3-16.
- (10) Porter 351.
- (11) Lawrence Buell, *Literary Transcendentalism: Style and Vision in the American Renaissance* (Ithaca, NY: Cornell UP, 1973) 93; Donald M. Scott, "Print and the Public Lecture System, 1840-1860," *Printing and Society in Early America: A Publication of the American Antiquarian Society Program in the History of the Book in American Culture*, ed. William L. Joyce et al. (Worcester: American Antiquarian Society, 1983) 278-99.
- (12) ユルゲン・ハバーマス 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷 貞雄, 山田 政行訳 (未来社, 1990) 216-19.
- (13) William Charvat, *The Profession of Authorship in America, 1800-1870*, ed. Matthew J. Bruccoli (New York: Columbia UP, 1968).
- (4) Porter 350-57.
- (15) Alexis de Tocquville, *Democracy in America*, trans. George Lawrence (Chicago: Encyclopaedia Britannica Inc., 1990) 277-79. 『アメリカの民主政治』講談社学術文庫, 井伊 玄太郎訳 (講談社, 1987)
- (16) Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of*

Nathaniel Hawthorne, ed. William Charvat et al., vol.1 (Columbus: Ohio State UP, 1962), 以下 *The Scarlet Letter* からの引用はこの版に基づき、頁数は括弧内に示す。なお日本語訳については、八木敏雄訳『完訳緋文字』（岩波書店、1992）を参照した。

- (17) Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace* (Chicago: The U of Chicago P, 1985) 75.
- (18) Michael T. Gilmore, "The Literature of the Revolutionary and Early National Periods," *The Cambridge History of American Literature*, vol.1, ed. Sacvan Bercovitch et al. (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 363.
- (19) この"brand"という単語からは、許されざる罪を見つけた"Ethan Brand"の主人公も連想される。
- (20) 特にニュー・イングランドの清教徒たちの用いていたタイポロジーの伝統については Thomas M. Davis が詳しく論じている。デイヴィスによれば、ともすればアレゴリー解釈として空想に走りがちな予型論について、ニューイングランドの清教徒たちは、聖書間の対応関係に厳密に限定する形で、予型論解釈を利用していたという。さらにはカルヴィンも "the whole cultus of the law, taken literally and not as shadows and figures corresponding to the truth, will be utterly ridiculous" として予型論による解釈を支持していた。 Thomas M. Davis, "The Traditions of Puritan Typology," *Typology and Early American Literature*, ed. Sacvan Bercovitch (Massachusetts: The U of Massachusetts P, 1972) 10-45.